
母と姉は我が同級生りりーふ！

雨永祭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

母と姉は我が同級生りりーふ！

【Nコード】

N9814C

【作者名】

雨永祭

【あらすじ】

主人公・春宮深桜^{ハルミヤミオ}は父の桜弥^{オウヤ}と兄の璃桜^{リオ}の三人暮らし。そんなある時、桜弥は再婚、璃桜が結婚した。本来ならば嬉しい事のはずなのに深桜はまったく喜べない。なぜなら、その相手が二人共幼馴染みで……！？思った以上に賛否両論だったりそうじゃなかったりした短編『母と姉は我が同級生』を手直しとか変更とかした『主人公救済』版。

1・吉報か凶報か、それは人によりけり

「ただいま……？」

おかしい。

春宮深桜は玄関で首を傾げた。

今の時間は午後七時。いつもより遅い帰宅、こういう時は彼の父と兄がすっ飛んで来るはずなのだが一向にそれが無い。

普段はイラツと来るのにいざそれが無いと不気味な事この上なかった。

これは何かあるのでは？

そんな確信を胸に、抜き足差し足で慎重にリビングへと向かう。そしてリビングを覗くと――

「何やってんの？」

何の事は無く、深桜の父、春宮桜弥と兄、春宮璃桜、そして幼馴染みの秋野世胡がテーブルを囲んで座っていた。

「お、深桜」

「おかえり、深桜。遅かったな」

「おかえり。こんな時間まで何してるのよ」

深桜はちよつと、と取りあえず返事をする、

「丁度良い時に帰って来たな。取りあえずここに座れ」

桜弥に促されるままにテーブルに座ると妙に緊張感溢れる空気が流れ出した。

（な、何これ？　ってか世胡と兄貴近くね？）

嫌な予感がした。

絶対に何か悪い事が起きる。

そもそもなぜ世胡と璃桜が一緒になって座っていて、どこか緊張しているのか？

そして、次の璃桜の発言に深桜は愕然とし思考が止まり意識が飛び掛けて床に手を着いた。

「俺、世胡ちゃんと結婚するから」

桜弥はしばらく黙り、

「よろしく願います、おじ——いえ、”お父さん”」

顔を朱に染めた世胡の言葉に桜弥は猛然と立ち上がり、

「ひゃっ！」

「親父っ、何すんだ！」

世胡の手を取ってリビングから飛び出し、それを追いかけて璃桜も飛び出した。

リビングには茫然自失の深桜が一人取り残されていた。

1・吉報か凶報か、それは人によりけり（後書き）

どうも、どうしても深桜には幸せになってもらいたいので始めてしまいました。

短編の方はオチが何とも言えない微妙なものになってたのでこの『りりーふ！』では誰もが納得出来るものになるように頑張ります！

2・漏洩か相愛か、その重さは釣り合わない

「深璃^{みり}、見てくれよ。ついに、ついに俺達に『娘』が出来たよ」

桜弥は泣きながら仏壇の写真に向かって璃桜結婚の報告をしていた。

写真に写っているのは黒く長い髪を右側にまとめて結い、素敵な笑顔を浮かべた亡き妻・深璃だった。

「お義父さん……」

「親父……」

先ほどまで驚きつ放しだった世胡と怒っていた璃桜もそんな父の姿に穏やかな表情を浮かべていた。

「それにしても……」

桜弥は涙を拭いながらしみじみと呟いた。

「世胡ちゃんが璃桜と結婚するとはなあ……。ちえっ、あの時は俺が世胡ちゃんと結婚出来るって思ったのになあ……」

璃桜は何言っただこの親父はといった様子で首を傾げたが世胡は顔を真っ赤にして桜弥に慌てて詰め寄った。

「お、おおお義父さんっ！ その事は秘密だっ……」

「秘密？」

「あ……」

顔面蒼白の世胡。桜弥も苦虫を潰した様な表情で璃桜を見ない様にしていた。

この二人の様子に璃桜は釈然せず、世胡に詰め寄る。

「世胡、『秘密』って……それも親父との秘密ってどういう事だ？」
「え、あ、う……」

どもる世胡。

自分はこの人の妻になるのに『あの事』を黙っていて良いのだからか？

その疑問の答えはすぐに出た。

答えなければ。

しかし、そうは思っても羞恥やら罪悪感やらにためらわれてしまふ。

それでも意を決して答えようと口を開いた。

「ごめんなさい、璃桜さん。実は私、お義父さんと関係を持った事があるの」

璃桜の顔がこれ以上無いくらいに引きつり、魚の様に口をパクパクさせる。

「な、なな、な……っ!？」

そんな様子の璃桜に心を痛めながら世胡は事の次第を絞り出すように話し始めた。

「理由は本当に単純で、今でもなんて馬鹿だったんだろうって思ってる。

でも、でもっ！

あんのアマアッ！」

何かスイッチが入ったのか世胡の表情には怒りが浮かんでいた。
まるで般若の様。

そのままにしていると今にも暴れ出しそうな勢いだったので璃桜は慌てて世胡をなだめる。

「わ、分かったから落ち着いてっ」

「ふーっ、ふーっ……はぁ、取り乱しちゃってごめんなさい。
でも、これだけは言わせて。

お義父さんと関係を持ったのは一回だけで、璃桜さんと付き合いだす前なの」

「ああ、分かってるさ。ありがとうな、正直に話してくれて」

そう言って世胡を抱き締める璃桜。そんな璃桜を世胡はうつとりと見つめた。

「璃桜さん……」

見つめ合う二人。どっからどう見ても自分達の世界に入っていた。桜弥はここぞとばかりに窓からの脱出を敢行。しかし、それは叶う事は無かった。

「どこに行くつもりだ、親父」

「……ちよっとコンビニまで」

冷や汗を流す桜弥に一步、また一步と迫る璃桜。その顔はどこからどう見てもキレていた。

自分にも若干どころかなり原因のある世胡は現実に戻り、引きつり気味の表情で璃桜をたしなめてみる。

「り、璃桜さんっ、この事は私が悪いんだし、ね？」

「うん、そうだね。それは分かるんだけどやっぱりはじめはつけないと」

「そ、そっかあ……じゃ、じゃあ私夕飯の準備して来るね」

（ごめんなさい、お義父さん……）

「さあ、覚悟は出来てるかこの犯罪者」

「なんだと……それを言うなら璃桜だって犯罪者だろうっ！」

世胡は、不毛極まりない言い争いをバツクに内心で桜弥に謝りながらキツチンに向かおうと今までいた座敷から出る。出たところに深桜がいた。

「わっ！ びつくりしたあ……こんなとこで何してるの？」

「ん、別に何も……」

いまいち元気の無い深桜に首をかしげる。
どうしたんだろう？

「俺もう寝るから飯いらない」

「え？」

聴くのがやつの声。そうして、深桜は自分の部屋に行ってしまった。

「……深桜？」

2・漏洩が相愛か、その重さは釣り合わない（後書き）

果たして、深桜に報われる日が来るのか？

まあ、来てくれないと困るけども。

次の話では深桜がマジで泣きます。それはもう可愛らしく。
こつこ期待！

3・自殺が家出か、とばつちりを受けたのは友人

深桜が目覚めると部屋は暗かった。時計の針は三時十五分を示していた。

どうにもスツキリしない。

『お義父さんと関係を持った事がある』

その世胡の言葉が頭の中で渦巻いていた。

それはあまりに衝撃的で、最悪極まりないものだった。そんな事実は誰であつてもヘコんでしまう。下手したらヘコむどころか死ぬか生きるかの問題になりかねない。

実際、深桜の視線は机の上のカッターと窓をさまよっていた。

自殺、か……。

そして、深桜が出した答えは――

まだ薄暗い神社は静かだった。不気味にすら感じられるが今の深桜に取ってこの静けさは心地良かった。

やはり自殺なんて馬鹿馬鹿しい。でもあの家には居たくない。

結局身支度をして深桜はいつも来ている神社へとやって来たのだつた。

ここ、晴憐神社は旦御町あさみちようでも一番高い所にありそこから町を一望でき、何かある度に深桜はここに来ていた。

深桜は何をするわけでもなく、神社にある大きめの岩に腰掛けてただただボーッとしていた。

どれくらいそうしていたのか、気が付くとすっかり太陽が登っていた。

携帯電話で時間を確認。時刻は八時。

「……四時間もボーツとしてたのか」

溜め息を吐くと聞き慣れた声が深桜を呼んだ。

「あれ、お前こんなところで何してんだ？」

「ほんとだ。深桜くん、おはよ」

そこにいたのは中学からの親友の圭次と同じく中学からの友人でこの神社の娘でなぜか巫女服姿の季明きあきだった。

カップルを見て余計鬱な気分になって来た深桜は投げやりに質問した。

「お前からこそ何してんだよ……」

その問いに季明は首を傾げ、圭次が深桜に近付き耳打ちした。

「いやな、ちょっとそこでコスプレ野外プレイをしようと思ってな。そういう訳だから帰ってくれと助かるよ」

そのどうしようも無い内容に無意識の内に現実から逃避していた深桜の思考が一気に引き戻された。

それは『恋するあの子が兄と結婚する上に自分の父親と関係を持っていた』という悲惨極まりない現実。その哀しさと切なさは他の追隨を許さずに、深桜の心を席卷し、深桜に多大なる悪影響——世胡と璃桜と桜弥が繰り広げる自主規制な妄想——を与えた。

「……………」

「……深桜？」

「深桜くんどうしたの？」

様子がおかしくなった深桜に二人は首を傾げる。その間も深桜の妄想は進み、妄想の中の三人が《自主規制》になだれ込んだところで何かの糸がプツリと深桜の中で切れた。

「……ひつく、あう、えつぐ……」

「「え」？」

プワツと涙が零れだし、とうとう深桜は泣き出した。

「うええええええええええええんっ！」

「ちよっ、深桜っ、え、ええっ!？」

困惑する圭次に季明は眉を吊り上げて問い詰める。

「ちよっと圭次っ！ 深桜くんは何言ったのよっ！」

突然の事に混乱をしていた圭次は思わず口を滑らせた。

「べ、別に何もしてねえってっ！ ただ季明と今からここ辺りでヤルから帰って……くれって……」

言ってる内に大変な事に気付き圭次は顔を青ざめる。そんな圭次に修羅のごとき威圧感を纏った季明が立ち塞がった。圭次の脳裏に今までの思い出が走馬灯の様に浮かんでは消えていく。

あ、これは死んだな。

「このっ、ド変態っ!!」

深桜の男子高校生とは思えない泣き声と何かを殴打する鈍く重い音が、いつまでも、いつまでも、晴憐神社に響いていた。

「うわああああんっ」

ここは神社の裏手にある季明の家のリビング。顔を腫らした圭次とどこかスツキリとしている季明は泣き続ける深桜の向かいに座り、尋ねる。

「なあ、深桜どうしたんだよ」

「えぐ、ひつく、あう、ひつく……うえええええええええええええんっ！」

深桜は涙が止まらず、どうしても答える事が出来ない。その様子に圭次と季明は顔を見合わせて溜め息を吐いた。

「こりゃ、ダメだ」

「どうしよっか？」

「分らん。取りあえず泣きやむまで待つか」

「それもそ——」

そこまで言いかけてリビングのドアが開き、そこから大きめのワイシャツ一枚だけというなまめかしい姿の女性が入って来た。

「あ、」

「さ、咲さん……」

季明の姉である咲は目を擦りながらリビングを見渡し、驚きに目を見開いた。

「深桜くんっ！」

咲は心配そうな顔で泣きじゃくる深桜の肩を掴んだ。

「ど、どうしたの？ 誰にやられたのっ？」

「ひっ、えっく、けい、えっく、けいじ、が、ぼ、ぼくに……」

先ほどよりは落ち着いたらしく、なんとかそこまで言うと咲が顔色を変えて圭次の方を振り向き、

「天誅っ！」

「咲さぶっ！」

「あっ」

咲の振り向きざまのハイキックが圭次の首を刈り取った。

それから一時間、咲と季明が着替え、圭次が意識を取り戻し、それからようやく深桜は泣きやんだ。

「はい、水」

「ぐす、ありがと」

深桜は季明から水を受け取り一気にあおると、圭次が尋ねようとしたのだが、

「なあ、深

「ねえ、深桜くんはどうして泣いてたのかな？ もし良かったらお姉さんに教えて欲しいな」……………」

あえなく咲に取られてしまった。

朝からツイてないと嘆き、季明にドンマイと慰められる圭次を尻目に『あのね、』ととても男子高校生とは思えない口調でポツリポツリと語り始めた。

3・自殺か家出か、とばっちりを受けたのは友人（後書き）

遅くなつてごめんなさい。ほんとにごめんなさい。あんまり深桜が可愛く無くてごめんなさい。ってか深桜のセリフの九割が泣き声って主人公としてどうなんだろう？

さて、事態はあまり進展してません。次回もたぶん進展しません。『母』が出るのもまだ先になりそう。ああ、パソコンが欲しいなあ……。それでは次回もお楽しみに。

4・異性が弟か、結果と過程は見合わない（前書き）

えー、なんと言いますか、遅れてしまって申し訳ありません。これから少しずつではありますが更新していくので見捨てないで読んでいただけたら嬉しいです。
それではどうぞ。

4・異性が弟か、結果と過程は見合わない

『そつか……深桜ってばそんなにショックを……』

電話の向こうの世胡は複雑そうな声音だった。そんな世胡に圭次は苦笑しつつも答える。

「まあ、そういう事だ。取りあえず今日一日はこっちで深桜を預かるよ。俺も季明もいるから安心しろ」

『うん、ありがと。それじゃ——』

「あ、ちよつと待てよ」

『ん？ どうしたの？』

切ろうとした所を止められて世胡が不思議そうな声を出す。

「深桜に聞いてからずつと気になってたんだけどさ、お前の親はなんて言ってたんだ？ 普通、高校生は親の承諾得ないと結婚出来ないだろ」

『え、マジっ？ 璃桜が義理の息子になるの？』って喜んでたよ』

圭次は猛烈に悲しくなってきた。果たして娘——それもまだ成人していない——の結婚に対して親がそんな軽くて良いのだろうか。

「それからもう一つ。何回か聞いてると思うけど、」

『何？』

圭次はその質問にどんな答えが返って来るのか分かりきっていたが尋ねてみた。

「深桜の事、どう思ってる？」

「あ、圭次どうだった？」

居間に戻ると、何かに腰掛けて季明はそう尋ねた。見るとそれは布団で簀巻きにされた咲。

「咲さん……」

「……無念だ」

深桜に手を出す度に痛い目を見るはずなのに。圭次はそう思わずにはいられなかった。気を取り直して圭次はさっきの世胡とのやり取りを季明に報告した。

「取りあえずは少しばかりこっちで深桜を預かることになったよ。かなり心配してたがな。」

あと、深桜の事どう思ってるか聞いたけど、『可愛くて仕方無い手の掛かる弟』だとさ」

「そっかぁ……」

それを聞いた季明はしみじみと頷く。

「どれ程時間をかけても、報われない人は報われないんだな……」。

骨折り損のくたびれ儲けっていうのはまさにこの事なんだろうね」

「言っただけ、切な過ぎるって」

「深桜くん……」

妙に暗い空気が流れ、どうしようかとそれぞれが思案していた時、

ぐ、グギョルル。

「……………」

「……………」

「……………」も、もうつ、こんな時に腹鳴らすな季明っ」

一気に場は白けた。

「よし、それじゃあ取りあえず飯にするか！」

「うん、そっだね！」

そう言つて圭次と季明は居間から出て行つた。残つたのは咲一人。
「あのお……これつてもしかしてもしかなくても放置プレイですか
かな？　おーいつ、マイシスター？　圭次くゝん？　あの……ちょ
つと？　私にこのままでいろと？　ちよつとした茶目つ氣じゃない
っ！　ねえ、ねえつてば！　私もご飯食べたい~~~~~っ！！」

5・犯罪者が否か、決めるのは君達（前書き）

お久しぶりです。

いや、何ていうか本当に遅くなってすいません。
それでは本編をどうぞ！

5・犯罪者か否か、決めるのは君達

香ばしいハーブの香り。

食卓には美味しそうなローストビーフ。

深桜はエプロンを外しながら、大声で全員を呼んだ。

「ご飯出来たよっ！」

そうしてダイニングにやって来たのは季明と咲。

深桜が季明と咲の家に転がり込んでから既に五日が経っていた。

何度か世胡や桜弥が訪ねて来たが深桜は帰ろうとはしなかった。

毎日の様に清田家の食卓でおさんどんをしていた。

「んっおいしっ」

「ありがと、咲さん」

この場で心の底から楽しんでいるのは咲だけで、季明は心配そうに深桜を見ているし、深桜は空元気でしか無かった。

「おや、今日はローストビーフかい？」

そう言って入って来たのは晴憐神社の神主であり、季明と咲の父である清田陽介だった。

「あ、はい、今ご飯持って来ますね」

「ありがとっ、深桜くん」

深桜が台所へ行った後、陽介は深い溜息を吐きながら食卓に着く。

「おかえり〜」

「おかえり、お父さん。溜息ついてどうしたの？」

「ただいま。いやね、深桜くんこのままでいいのになって思ってたね」

「そうだよね〜」

「まあ、」

咲は苦笑し、椅子の背もたれに体を預ける。

「昼ドラみたいなドロドロっぷりだからね〜、下手したら血で血を洗う大事件に成りかねないかもね〜」

季明は溜息を一つ。陽介は目頭を押さえて、

「そんなに酷いのか……」

嘆息を漏らした。

それとほとんど同時に深桜が戻って来た。笑顔で陽介の前にご飯と味噌汁を置いた。

「はい、どうぞ」

「うん、ありがとう」

陽介も笑顔でそれを受け取り、深桜がその隣りに座る。

『いただきます』

と、両手を合わせながら陽介は小さく溜息を吐いた。

「……………はあ」

湯煙沸き立つ広い檜風呂に浸かりながら、深桜は深く溜息を吐いた。家を出てからはや五日、何一つ区切りを付けない深桜はいい加減にうんざりしていた。一方で、よくまあ昼ドラみたいなヴァイオレンスなことにならなかったなと自分を褒める。

「ちよつといいかい？」

戸の向こうから陽介の声がした。

「どうしたんですか？」

返ってきたのは真剣な声だった。

「君は、このままでも良いのかい？」

良いわけはなかった。しかし、戻ってどうなる？

陽介は続ける。

「季明達から話は聞いたよ。君の今の状況はなんと言つか……キテレツだ。そして、桜弥は今すぐにでも地獄に落ちるべきだ。

でも、君がいつまでも家出しているのはそれだけじゃないだろう？

……璃桜さんと世胡ちゃんの結婚は嫌かい？」

「……そ」

深桜が口を開きかけたその瞬間、けたたましい音が響く。

『陽ちゃん！　おい、陽ちゃん！』

『お、おじさんっ！？』

『おおっ、季明ちゃん！　陽ちゃんは？　ってか、むしろ俺の深桜はっ！？』

聞き覚えのある声に深桜も陽介も顔を引きつらせた。

ドタドタとうるさ過ぎる足音。

それを引き止めようとする季明の声。

そして、勢い良く洗面所の戸が開かれる。

飛び込んで来たのは桜弥。

そして、

「深桜おおおおぶっ！！」

陽介の拳が桜弥の顔面に突き刺さり、桜弥はラリアットを食らった様に背中から床に落ちた。

その光景に季明は引きつった顔でふしゅー、と息を吐いている父親に尋ねた。

「お、お父さん？」

いいかい季明、と陽介は真剣な面持ちで諭すように語る。

「この男は、いたいけな少女に手を出した、最低最悪の色欲変態口コン淫魔人の腐れ外道なんだ。

人と許されない犯罪者だ。

だから、コイツみたいな男とは付き合いを持つちゃいけないよ。

そういう訳だから、今すぐこの白○野郎を屋根から逆さ吊りにして来てくれないか？」

「は？ さ、逆さ吊り？」

困惑する季明に陽介はニツコリと断言した。

「大丈夫、残念なことにこの男は煮ろうが焼こうがコールタールの海や生コンの海に沈めようが、死なないから。さあ、よろしく頼むよ」

「う、うん」

いいのかな、と思いながらも桜弥の足を掴み、引き摺りながら洗面所を出て行った。

「……………」

一部始終を聞きながら、深桜はなんだか悲しい気持ちで三角座りをしていた。

（最低最悪の色欲変態ロリコン淫魔人の腐れ外道って……犯罪者って……。俺ってそんな奴の息子なんだよな……）

悲し過ぎて涙が一粒、湯船に落ちた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9814c/>

母と姉は我が同級生りりーふ！

2010年10月9日19時44分発行